

沙漠に一本のポプラを

大船渡市 小原 英



のは、沙漠はもともと乾燥地であり、沙漠は地下水が高く、植林出来る場所である意地

四時間。夜明けの車窓から中国の大地に見入る。山に緑がなく荒れ地むき出しの風景がつづく。

くなる。砂は縮まっていてわずかに湿り気もあった。深くなるにつれて穴の縁に座り込んでの作業だ。長袖、長ズボン、帽子、サン

かつては緑豊かな草原でモンゴルの人々の遊牧地。より高く充れるカシミアに見せられ山羊の飼育が急増し緑が失われ、沙漠が拡大している。このままでは百年後には北京市が沙漠にのみ込まれるという。沙漠の移動は風により黄砂となつて日本にも達している。

「北京空港の気温は三八度です」一瞬、どよめきが機内に起こった。経験したことのない暑さではないか。その先の沙漠は一体どんななんだろうか。

協会が主唱しているのはかつて鳥取砂丘の緑化を手掛けた遠山正瑛氏。NHKのプロジェクTVでも紹介されたが、氏は今年二月、九七歳の生涯を閉じられた。僧職にもあった氏の最後は自ら食を断つて永眠されたという(合掌)。

昼近くモンゴル最大の都市「包頭」へさらにバスで目的地の「恩格貝」へ二時間余りで到着。

間がさらりとしていい。横一列になつて五回ほど前に掘り進み苗木を植える。根を保水剤につけ、植へ穴に立て、七割ほど埋め戻ししっかりと踏み固める。その後植えた穴にたっぷりと水を注ぐ。この作業をひたすら繰り返すこと二日半。

今年三回目の植林に参加した。流れに埋まりながらなお負けずに枝葉を伸ばしている姿に思わず駆け寄る。

砂漠に植林しようと、初めてこのツアーに参加した。この一〇年間ずっとボランティアを募集して三〇〇万本の植林をしているのは「日本沙漠緑化実践協会」*協会では沙漠としている

初参加は二〇〇一年「一次緑の協力隊」N T T 労組十八名と個人参加六名の二四名が北京空港に降り立った。むっとする熱気の中現地ガイドの迎えを受けて寝台特急で包頭まで十

翌日から植樹開始。まず植え穴を掘る。直径四十センチ、深さ八十センチ。スコップの握りまでの深さになる。表面から十センチも掘ると回りが崩れな

最後の木に記念の名札をつけて植樹終了。

